

緑のまきば

1984 4621

小金井緑町教会
小 金 井 緑 町 教 会
小金井市緑町四一十六一三三
電話〇四三三一八一七九六一
編集 牧師 山 本 圭 一

権威ある新しい教え

(マルコ1章21-28)

教 説

山 本 圭 一

カペナウムを三月下旬訪れた時町はひっそりと静まりかえって、ブルーゲンビリヤの花が赤紫色に美しく咲きそろっていた。主イエスの時代、ここは交易の中心地、生活物資の集散地として、ガリラヤ湖畔で賑わしく栄えた町だ。交易税や人頭税を集めた税関があり、百卒長の率いるローマ軍も駐留していた。

主イエスに召された四人の弟子はいずれも漁師であった。シモンとアンドレ、ヤコブとヨハネ。彼らは安息日にユダヤの会堂に入つて教えらるるイエスに従つた。今神の国の宣教が特定の場所―カペナウムで、特定の時―安息日に始まるうとしていた。

この光景を思い浮べると、私たちが初めて小金井に移ってきた日のことが二重写しになる。昭和40年12月20日、もう18年も前のこと

だ。冬の日はず早く落ちて、寒い夕暮れの中で、いささかの緊張と不安を覚えながら、みんなで輪になつて祈つたことを、想い起す。

キリストの民は、この場所に集められ、その集いにおいて主と出会う。主に招かれ主の教えを聞く群れが、主の体なる教会へみちびかれ、成長してゆくのである。

このカペナウムにおける主イエスの教えと活動は、ここ小金井にまで及ぶ教会の最も根源的なものを、私たちに示す。

「イエスは会堂に入つて教えられた」(マルコ1章21)。主の宣教は不断の継続的行為である。

場所はユダヤ教の会堂シナゴグ、まず会堂司が聖書(旧約)を渡しこれが朗読され、主は会衆に向つて坐り説教をされた。その時、人々は「その教えに驚いた」。何に驚いたかは、具体的に記されてい

ない。しかし人々の魂に大きな衝撃が起つた。ここにユダヤの律法学者と、主イエスの教えとの決定的な相違が見られたのである。

当時、ユダヤ教の心ある律法学者たちは、旧約聖書を来るべきメシヤ(救主)と結びつけて説きあかしたものの、多くの者は煩瑣な律法解釈とその適応に終つた。その最も純粹で忠実な場合でも、教えの権威は、彼らの「あなたに」指されたにすぎない。しかし主がみ言葉を教えられた時、それは権威についての教ではなく人々が驚いて口々に言つたように「権威ある教え」であつた。

この権威とは何であつたのか。これは主イエスが何らかの形で自らに要求されたものではない。主に出会つた人々によつて、主に帰せられたものである。明らかに人々の主に対する驚きの表白、むしろ告白であつた。

その時、唐突に一人のけがれた霊につかれた者が、登場する。

「ナザレのイエスよ。；わたしたちを滅ぼしにこられたのですか」彼は「われわれ」(複数)と自称してやまない。マルコ5章9にはこの悪霊の名がレギオンとある。歩兵と騎兵とかなるローマ軍団の名であり、その数は四千人から六

千人を擁していた、といわれる。多くの困窮に引き渡され弱り果てた彼自身の姿が、強烈に浮ぶ。この狂乱の男が入つてきた。それを見た人々があれよあれよと驚く。

この証言の重みは、ただそれだけではない。「あなたは、神はただひとりであると信じているのか。それは結構である。悪霊どもでさえ、信じておののいている」(ヤコブ2章19)。

主の教えを聞く教会の内的状況は無風ではない。主に心を開こうとする時、悪霊は私たちにも殺到する。今も生ける主は現代の悪霊から、さらに古い自己と世界の規範から人々を解放し、みことばの慰めをもつて私たちを導かれる。

信仰の現実には、人間の権威の空虚さを照し出す。「黙れ、この人の言葉が、人間存在に對して、あらゆる権威を否定し、すべての人は神の前に罪を負うことを映し出す。権威の失われた時代は、罪の赦しの福音を拒むことによつて、愛と責任をも放棄する結果となつた。今こそ、真の権威が力や命令ではなく、多くの人のあがないとして命を捨てられた主の愛にのみあることを銘記したい、と思う。